

## 農業・農村振興長期計画に係るトピックス

新たな取組

1. 暑さに強い米「ひなた舞」の開発
2. みやざき施設園芸デジタル化推進プロジェクト
3. 総合農業試験場の機能強化
4. 畜産試験場の機能強化

令和8年2月 農政水産部

# 1. 暑さに強い米「ひなた舞」の開発について

## (1) 育成の背景

本県の主力品種である「ヒノヒカリ」の品質が、地球温暖化の影響により不安定化

このため、高温条件下でも品質や食味が優れる新たな品種として「南海189号」を育成



## (2) 品種名の決定

- ・ 応募総数 **4,035**件 (R7年4/18~5/17)
- ・ 品種名検討委員会で「ひなた舞」を決定

「ひなた舞」は

- 舞い上がるほどのおいしさや、米粒が立って舞っている様子
- 音の響きが良く、米と舞をかけられる
- 神楽が連想され、宮崎らしい打ち出しができるをイメージし命名

- ⇒ 令和7年9月29日に国へ品種登録を出願
- ⇒ 令和8年1月6日に国が種苗法に基づく品種登録出願を受理

### (3) 「ひなた舞」の特徴

県内主力品種の「ヒノヒカリ」に比べ

- ・ 高温での品質低下が少ない
- ・ 病気（いもち病）に強い
- ・ 収穫量は1割程度多い
- ・ 食味は同程度で優れている
- ・ 生育が3～4日遅く、作業ピークを分散できる

#### 【参考】玄米品質の比較

透明度が高い



ひなた舞

白濁した粒が多い



ヒノヒカリ

### (4) 県内の生産者・消費者の評価

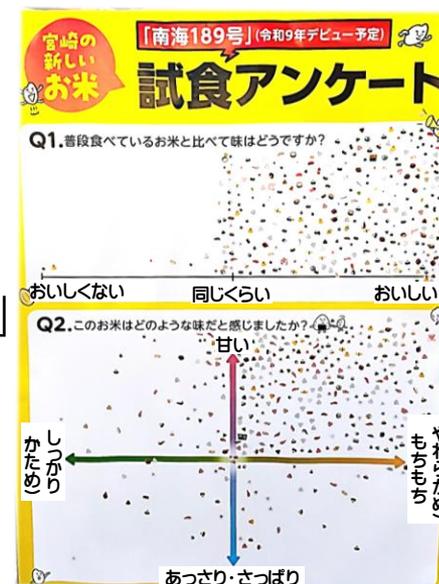
〔生産者〕（R7年試験栽培を行った20者の意見）

- ・ 品質と収量に優れている
- ・ 「ひなた舞」に合う栽培技術の確立が必要

〔消費者〕

（R7.12月アンケート約400件）

- ・ 普段食べているお米と比べ同じくらい「おいしい」
- ・ 甘くて、もちもちした味



### (5) 今後の予定

県内普通期水稲の作付地域において栽培を推進し、令和9年産から本格販売を予定

## 2. みやざき施設園芸デジタル化推進プロジェクト（Dプロ）について

### （1）現状

施設園芸の  
面積・生産量・産出額の低下



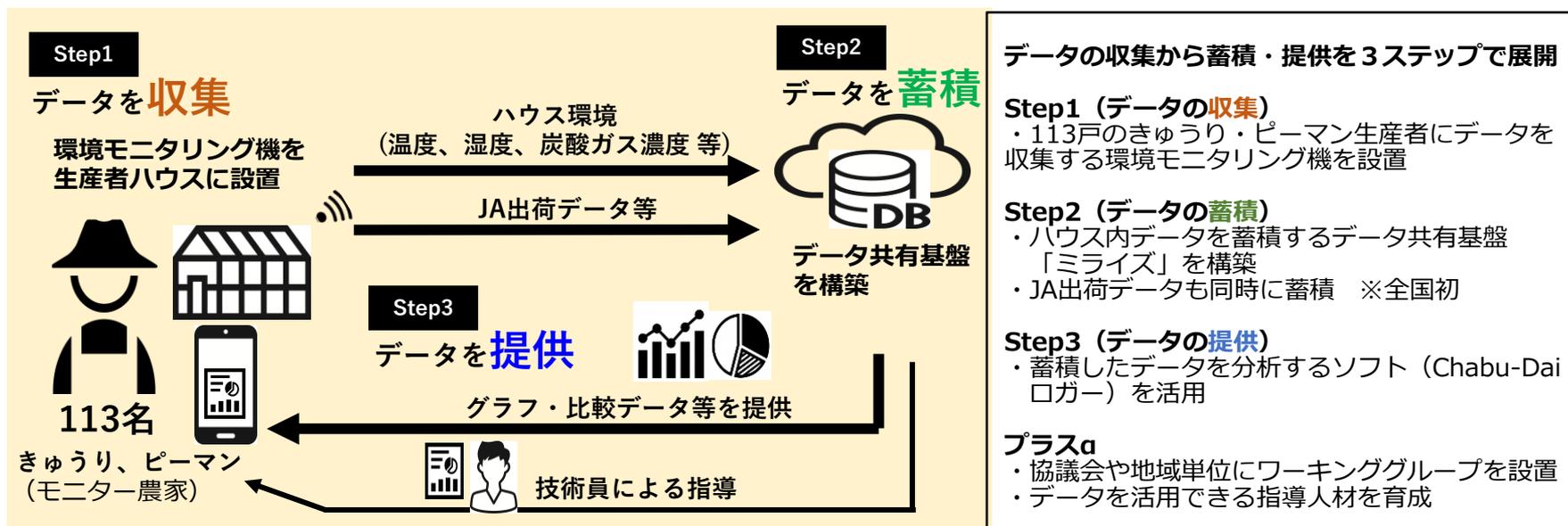
### （2）課題

生産性の向上（反収の増加）

- ・誰もがデータを利用できる仕組みの構築
- ・AIを活用したデータの高度分析
- ・データを活用した栽培管理ができる人材の育成

### （3）取組

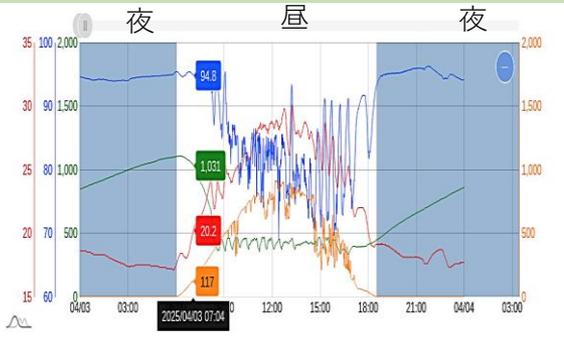
- ・令和4年度から、施設園芸のデジタル化推進プロジェクト（Dプロ）を開始
- ・データ活用により飛躍的な収量向上を実現している生産部会の取組を、**県内全域に拡大する仕組みを構築**



現在のデータ

### アプリで閲覧できる画面

#### ハウス環境データ



#### 純光合成速度

温度	26.1°C	湿度	96.3%
CO2濃度	282ppm	日射量	451W/m <sup>2</sup>

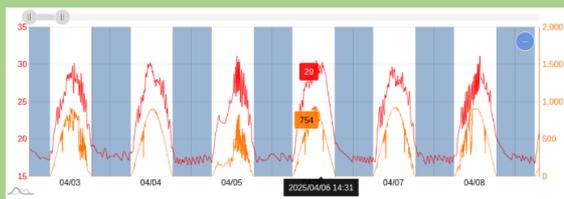
ハウス環境データから算出

純光合成速度  
0.184mg/(m<sup>2</sup>s)

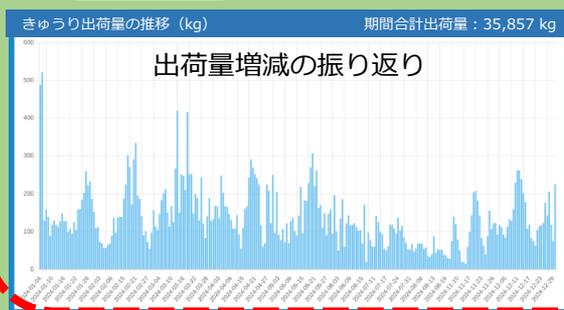
- 環境(温度、湿度、CO<sub>2</sub>濃度等)が確認できる
- 見たいデータだけ選択することも可能

過去のデータ

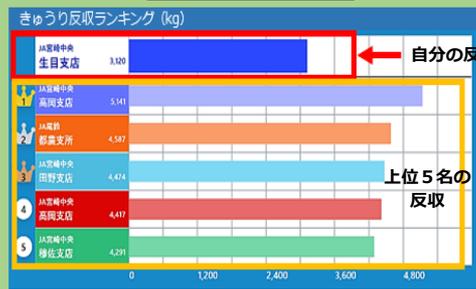
#### ハウス環境データ (過去1週間のデータ)



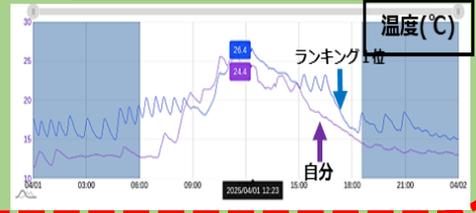
#### 出荷データ (JAみやざき出荷分)



#### 反収ランキング



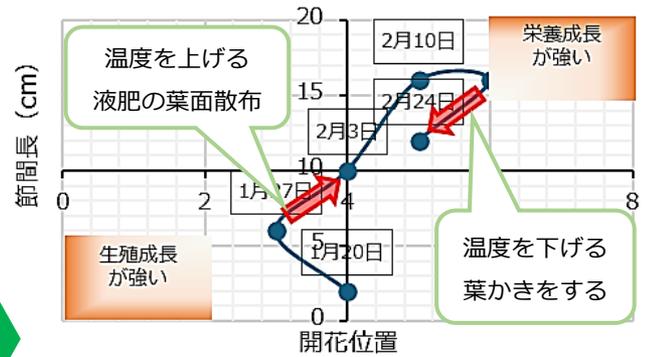
#### 上位ランキング者との比較



### データに基づき 生産者のとるべき行動

収量が最大となるよう 生育のバランスをコントロール

#### きゅうりの生育管理のイメージ



- 換気のタイミングの改善
- 暖房の設定温度の改善
- CO<sub>2</sub>施用の時間等の改善
- かん水量や回数の改善
- 葉かき等による樹勢の管理 など

- 結果を出荷データで評価し更なる改善
- 優良生産者との比較による更なる改善



### 3. 総合農業試験場の機能強化について

#### (1) 求められる農業試験研究と課題

##### 求められる農業試験研究

- ① 省力化や効率化に繋がるスマート農業への対応
- ② 気候変動や新奇病害虫の発生等に対応した品種や技術の開発
- ③ みどりの食料システム戦略を踏まえた持続可能な農業の実現
- ④ 高度な研究を担う人材の育成

##### 農業試験研究の現状・課題

###### 薬草・地域作物センター〈H13 整備〉

- 県全域に産地が点在し、立地の必然性が低下  
【例 ホップ：延岡市 白ウコン：西北諸 など】
- 圃場が狭く、スマート化への対応が困難
- 乾燥技術や栽培用機械の開発は実施困難
- 研究機材や機械の故障・修繕が増加

###### 畑作園芸支場〈H11 整備〉

- 新奇病害虫対策に関する設備や人材（専門的知識等）の面で対応が困難
- 水田がないため水田を活用した野菜に関する研究は実施不能
- 研究機材や機械の故障・修繕が増加



###### 茶業支場〈S44 整備〉

- 広大な茶園や新しい製茶実験室（R4整備）などの資産を保有
- 県立農業大学校が近く、担い手育成等で連携
- 施設・設備が老朽化

###### 本場〈H17 再整備（事務棟：S41）〉

- 保有する様々な研究装置を支場職員に利用してもらうことが困難
- 高度化・多様化する研究ニーズへの対応について、支場職員との連携強化が必要
- 研究機材や機械の故障・修繕が増加

###### 亜熱帯作物支場〈H13 整備〉

- 温暖化等により産地が県全域に拡大し、設立時の立地の必然性(無霜地帯)が低下  
【例 マンゴー：宮崎市、小林市、日向市 など】
- 研究機材や機械の故障・修繕が増加

## (2) 機能強化の考え方

技術革新の進展や研究課題の高度化・多様化に迅速に対応するため、  
**「研究資源の集中」、「現地への更なる密着」、「実践農業者・営農指導人材の育成」**  
が必要と考える

### 👉 研究資源の集中

これまでの水稻、野菜、果樹、花き等の品目縦割りの部・支場体制を見直し、スマート農業や気候変動への対応、水田や畑地の高度利用等の施策展開を見据え、専門性の確保や研究技術の継承にも留意しつつ、**横断的な課題に対応できる研究体制**を構築

### 👉 現地への更なる密着

技術革新の進展や新奇病害虫の発生が相次ぐ等、これまで以上に迅速な課題解決が求められており、かつ成果の早期普及に向け、農業団体や市町村、国・大学等と積極的に連携しながら、試験場内のみならず、**県全体を試験場所とみなす地域フィールドを設定**し、現地試験を展開

### 👉 実践農業者・営農指導人材の育成

試験研究部門と農業改良普及センター、農業大学校や宮崎大学をはじめとする県内大学等の教育・研究機関が連携を強化し、**高度な知識と技術を有する実践農業者・営農指導人材の育成**を加速

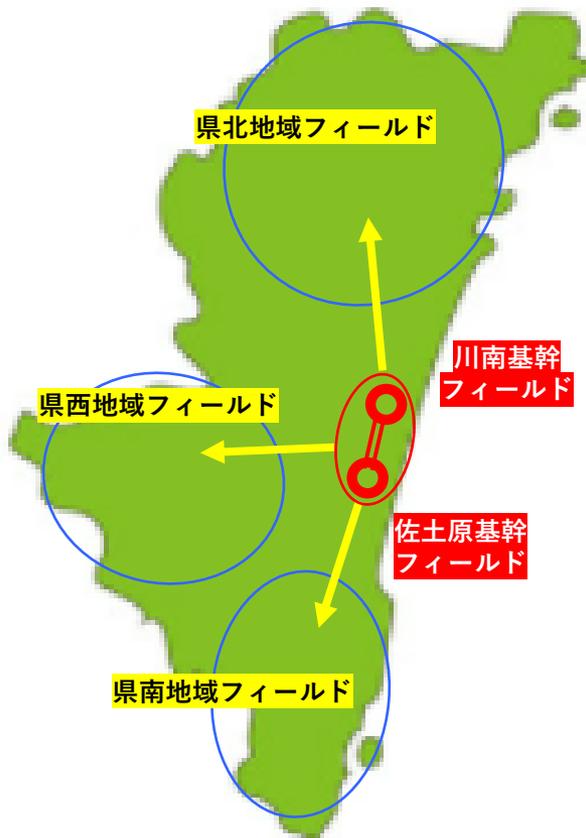
### (3) 機能強化の方向性

- 分野横断的な課題にも対応できる研究開発力の強化に向けては、**分散している現行の研究体制を集約し、求められる研究ニーズに予算と人員を集中**することで、機能強化を図る必要がある。
- 集約に当たっては、研究拠点を1カ所にする形が業務効率の面では最も効果的だが、移転に伴うコストや品目の特性等を総合的に判断すると、研究拠点の集約は『**2拠点体制（本場+茶業支場）**』が最適と考える。

### (4) 機能強化計画



## (5) 機能強化により実現する農業の将来像



ポイント

- 農業の生産性向上
- 気候変動や環境負荷低減への対応
- 次代を担う人材の確保

土地利用型  
作物

- スマート農業の導入による経営規模の拡大
- 水田を活用した水稲と露地野菜の二毛作産地の拡大

施設園芸

- 複合環境制御技術やAI利用の普及による単収の増加
- 暑熱対策による施設園芸等の生産性低下の防止

果樹

- スマート農業の導入による軽労化、生産性の向上
- 温暖化を活かした亜熱帯果樹等の産地化

病害虫

- 気候変動に伴う新奇病害虫への対応の迅速化
- 天敵等を利用した環境に優しい病害虫防除技術の確立

品種開発

- 新たな育種法の導入による高温耐性品種や病害虫抵抗性品種の品種開発の迅速化、効率化

人材

- 共同研究等を通じた研究者や指導人材の確保、育成
- 農業大学校等と連携した農業人材の確保、育成

## 4. 畜産試験場の機能強化について

### (1) 研究体制と現状



#### 本場（高原町）

##### 肉用牛部

- 肉用牛の育種改良と飼養管理に関する研究

##### 酪農飼料部

- 乳用牛の飼養管理に関する研究
- 飼料作物に関する研究

##### 家畜バイオテク部

- 受精卵移植技術及び飼養管理の効率化に関する研究

#### 〈S58 整備〉

※施設・設備の老朽化が著しい

#### 支場（川南町）

##### 養豚科

- 豚の生産性向上及び飼養管理に関する研究

##### 養鶏科

- みやざき地頭鶏の改良増殖及び飼養管理に関する研究

##### 環境衛生科

- 家畜排せつ物処理に関する研究

#### 〈H13 整備〉

※周辺に養豚・養鶏農家が多く、家畜伝染病の発生リスクが非常に高い

## (2) 求められる試験研究と課題

### 求められる試験研究

- ① スマート畜産に係る研究
- ② 多様な視点からの地域課題の解決に向けた技術開発や研究
- ③ ブランド戦略や輸出戦略を踏まえた研究
- ④ 実現可能な技術実装や所得向上につながるフィールド研究
- ⑤ 「環境負荷低減」に資する戦略的な研究

### 課題

- ✓ 研究と普及が密接に連携した現場密着型への変革
- ✓ 時代の潮流や新たな施策展開に対応できる技術開発や人材育成機関としての変革

## (3) 機能強化の考え方

### 👉 研究資源の選択・集中

バイオマス等家畜排せつ物の有効利用や国産濃厚飼料の増産、スマート化など **畜種横断的な重要課題**に対応し、**フィールド試験**に展開できるように研究内容を選択・集中するとともに、**家畜防疫体制の一層の強化**

### 👉 現地・関係機関との連携

技術革新の進展や新奇病害虫の発生、異常気象が相次ぐ等、これまで以上に迅速な課題解決が求められており、かつ成果の早期普及に向け、普及センターやJAをはじめとする関係団体、市町村はもとより、国や大学等と積極的に連携し、場内のみならず、**県全体を試験フィールドとする現地試験**を展開

### 👉 実践・指導人材の育成

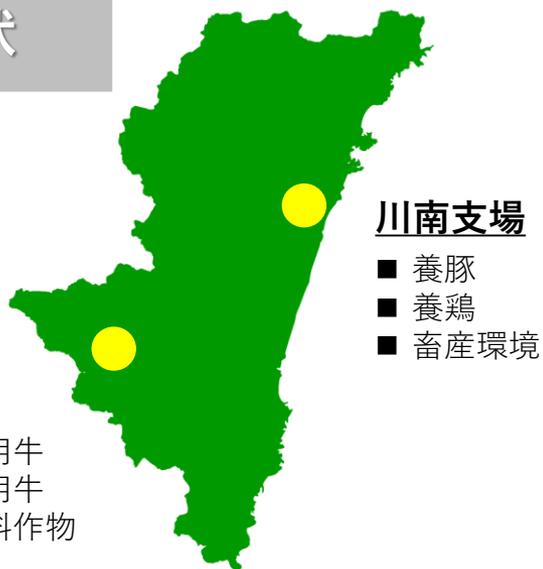
大学や民間企業との連携（オープンイノベーション化）による研究員のスキルアップや人材育成・教育への貢献、生産者・技術指導者（JA等）との研修・交流により、**高度な知識と技術を有する実践人材及び指導人材の育成拠点**の構築

## (4) 機能強化の方向性

- ▶ 試験研究の高度化と効率化の両立や運営体制の合理化に向け、関係機関との連携も含めた機能強化を図る必要がある。
- ▶ 家畜防疫及び試験研究の効率化、経済性等を考慮し、パターン分けして検討を行ったところ、**『研究機能を本場に集約し、かつ関係機関との連携』が最適**と考える。

## (5) 機能強化計画

現状

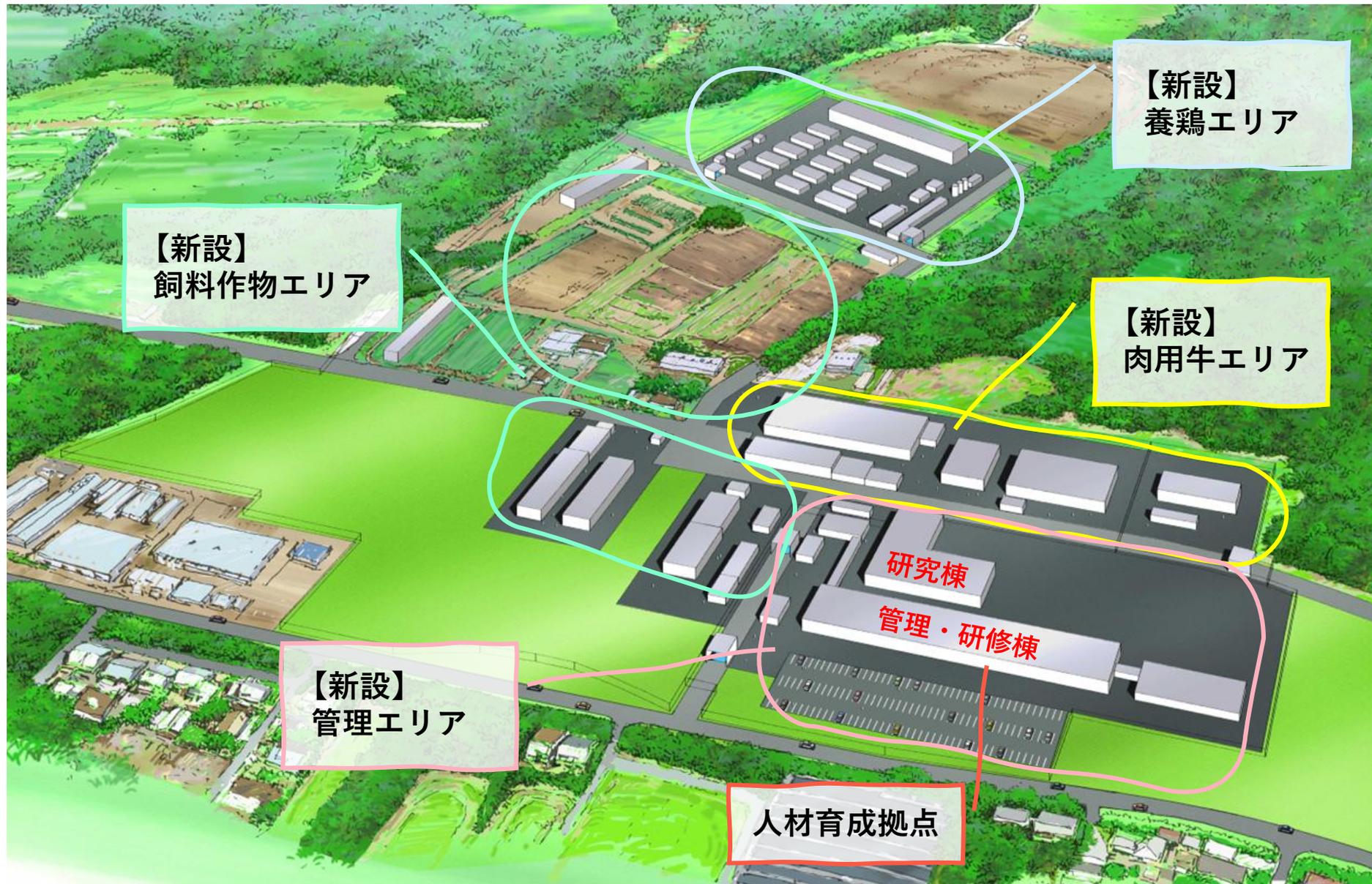


試験研究機能を  
本場に集約

機能強化後



## (6) 整備イメージ図



# (7) 機能強化により実現する畜産業の将来像

**肉用牛**

- 本県種雄牛の改良方針に基づく宮崎牛ブランドの強化
- 販売戦略を踏まえた肉用牛生産



**鶏**

- みやざき地頭鶏のブランド維持及び生産性向上
- 所得向上につながる技術の定着



**飼料作物**

- スマート機器導入による省力化
- 異常気象に対応した作付体系の普及
- 粗飼料自給率の向上



**環境衛生**

- 環境負荷軽減、省力化及び高位平準化のためのスマート機器の導入



**乳用牛**

- 気候変動に対応した飼養管理技術の確立
- スマート機器の導入による省力化及び生産性の向上



**豚**

- 気候変動に対応した飼養管理技術の確立
- スマート機器の導入による省力化



本場を拠点とした全県下でのフィールド試験の実施

